

『ホタルの光は、なぜだらけ』 光る生き物をめぐる身近な大冒険

大場裕一 / 著 くもん出版 (2013年7月)



題名から内容を想像すると、ホタルに関するものかと思ってしまいますが、1ページ目から予想を覆されてしまいます。なにしろ、いきなりホタルミズ探しから始まるのですから(実は、私はここでいったん、読むのをやめてしまいました)。しかし、この発光するホタルミズというのは、日本で

はじめて発見されたのは、80年くらい前、その後見つかった例は数えるほどしかない、というのです。『そう簡単に見つかるはずもないでしょう』と筆者も書いています。

ところが、この筆者は、自身の勤務先である名古屋大学の自分の研究室がある建物を出たすぐのところにある、小さな自転車置き場から探し始めるのです。『もし見つかったら超ラッキー』と。そして、ミズの砂つぶ団子を積みあげた糞塊をみつけ、その下の土の中からホタルミズを見つけてしまうのです。

さて、光る生きもの＝発光生物には、ホタルのように体のそのものが光るものと、ホタルミズのように体の外に出

した液が光るものの、2つのタイプがあります。その他、魚やイカのなかまには、発光する細菌を体の中に増やして光っているものもあるそうです。筆者が見積もったところでは、地球上には数万種類の発光生物がいるということです。でも、と筆者は言います、こんなに種類が多い発光生物ですが、実際に自分で見つけて観察したことがある人は少ないのでは、と。遠くはなれたところに住んでいる生物と思っているのではないのでしょうか、と。実際にはすぐそばの自転車置き場にいるのに。

筆者は、科学者になるには自然をよく観察して『不思議だな』『なぜだろう?』と疑問を持つこと、そしてチャンスがあったら常識にとらわれずに、『もしかすると・』と行動してみることが大切、と説いています。この本は、発光生物のナゾを追いながら、科学者への入門書にもなっているのです。

もしかしたら、ホタルミズ、緑地にもいるかもしれません。 いるわけないなんて思わず、ぜひ探してみてください！
(遠藤)